

第39回全国中学生人権作文コンテスト愛知県大会最優秀賞

障害と向き合って見える未来

岡崎市立竜南中学校 2年 赤堀 陽南

「これからは、自分を認め、相手を認め、皆が活躍できる、そんな明るく楽しい、カラフルな世界を作っていきたいです。そこに素晴らしい未来が、待っていると信じて」

その言葉を言い終わった後、会場の中はしいんとなりました。そして、次の瞬間、会場中が盛大な拍手に包まれました。私は、「やりきった」その気持ちで胸がいっぱいでした。

私は、普通の人とは少し違った個性を持っています。それは、『注意欠陥多動性障害』通称— 『ADHD』という発達障害です。

発達障害とは、脳の作りが少し通常とは違うことから発生する生まれつきの障害のことで、現代の医学では、服薬によって症状を軽くすることは出来ても、完全に治すことは不可能とされています。

私の場合、主に不注意のせいで忘れ物、無くし物が非常に多かったり、集中力や学力の大きな偏りがあり、周りの人よりも日常生活で苦勞してしまいます。また、見た目ではとても分かりづらいので、助けてもらいたくても周りから理解されるのに時間がかかってしまうことがあるのも特徴の一つです。

自分が他の人と全体的にズレていると思い、気にし始めたのは、小学校四年生の頃でした。元々、幼いときから、幼稚園の先生や家族から、「少し変わっているね」と言われることがありました。でも、そのときは特に困ることは無く、皆と同じように集団生活をしていました。しかし、学年が上がるにつれ、小さな差は、次第に大きな差へと変わっていききました。

そして中学二年生になった今年の春、母のすすめで病院に行き検査を受けると、自分に発達障害があることを知りました。

初めてそのことを知ったとき、私はとても大きなショックを受けました。

今まではいつも仲の良かった母にも、

「なんで私が？ 全部お母さんのせいだよ！」

と強く当ってしまうことが多くなりお互いの気持ちはどんどんすれ違っていました。

そんなある日、国語の授業中に先生が、

「主張コンクールをするので、内容を決めてきてください」

と言いました。私は迷いました。自分の障害について書こうか、それとも全く別のものを書こうか。しかし、これをチャンスに多くの人に自分のことを知ってもらいたいという気持ちが強くなり、ADHDと生きていく自分のことについて書きました。

その作文は、クラス代表、学年代表となり、ついに全校の前で発表することになりました。

そのとき私は、最初とても怖かったです。けれど、同じ障害を持っている人の代表として、私は読む決意をしました。

発表は大成功でした。誰もばかにしたりからかうことはなく、最後まで真剣に聞いてくれました。本当に発表して良かったと思います。

それから、私の生活は大きく変わりました。忘れる事が多い私に対して、沢山の仲間が、「ちゃんとメモした？」とか、「忘れないようにね！」と声をかけてくれます。たった一つの秘密を言うだけで、周りはこんなにも変わります。母や友達との関係も、今まで以上に良くなったと思います。今は毎日がとても充実しています。

しかし、全てが上手くいくことはありません。まだ理解してくれないことがあり、ぶつかり合う相手もいます。でも、これから時間をかけ、しっかりと話し合えば、いつかきっとお互いに助け合える日が来ると信じています。

私は、他の人とは少し違う“個性”を持っています。それは、『発達障害』という個性です。

周りとは少し違う考え方で、皆をおどろかせたり、相手と自分の違うところを発見したりすることはとても楽しいです。

最後に。私の将来の夢は小説家です。大好きな文章を通して、多くの人に新たな考え、希望、感動を与えたいと思っています。そのために、明日も全力で障害と向き合い、明るく過ごしていきたいです。